

生き方『境界』 神様をどう見る

ヨハネ5：1～13

正義は神様にみる

応援することを「箱推し」、推しの魅力を周囲に伝える活動のことを「不教」と言います。推していることに熱い思いがあったり、真剣なあまり、人を批判したり、駄目出しをすることもあります。また、自分のことのように真剣に怒ることがあります。このように、自分の中に正義があるのです。人はこんなふうに何かに真剣になれるのです。でも、それが自分に向けることができたならなんと素晴らしいことでしょう。

正義というものを神様に見ることができたら良いが、もし自分が正義を持ってしまうと人を裁いてしまうため危険です。正義は人に振りかざすものではなく、自分自身に神の正義をもって、自分を見つめるためのものです。

童話「ごんぎつね」

いたずら好きの子ぎつね「ごん」は、山の中の森に住み、村にやってきてはいたずらをしていました。ある日、ごんは、村人の兵十が捕まえたうなぎを逃がします。しかし、兵十の母の死をきっかけに、ごんはいたずらを後悔し償いの気持ちから兵十の家に毎日食べ物をお届け続けるのです。ある日、ごんが家の中に入っていくのを見つけた兵十は、火縄銃でごんを撃ちます。そして土間におかれた栗を見て、食べ物を毎日届けてくれたのがごんだと気付くのでした。

この物語は、誰が正しくて、誰が悪いのでしょうか。正解がないのです。ごんがいたずらをしなければよかった。また、兵十が撃たなければよかったなど、色々な考え方があります。ごんは、いたずらばかりしていましたが、母の死を知って、兵十の気持ちになってみて、はじめて自分のしたことが悪かったんだということに気付きました。その後、ごんが悔い改めた姿が描かれているので、私たちは、ごんが悔い改めたということがわかります。しかし、私たちは、多くの出来事について、勝手に自分の目線で物事を判断しているので危険なのです。

ヨハネ5章1～16節

ごんぎつねの物語また今回の御言葉の箇所であるベテスダの池での出来事も、登場人物たちのそれぞれの目線や思惑の違いがあります。38年も歩けなかった人が歩けるようになって喜んで驚いたりするのではなく、怒ったり、人のせいにしていきます。

このように、神様が見ているところと自分が感じているところは違うのです。神様と私たちの目線が違うということが危険なのです。御言葉を読んで、神様がどう感じているのか、聖霊様とその御言葉を照らしてくださる方と感じあってほしいのです。

目線のずれは、被害者意識からきます。アダムとイブが最初に犯した罪もこのようなことから始まったのです。私たちもこの被害者意識によって人を裁いてしまいます。だから私たちは、神様に祈り、自分が罪を侵していることや目線がずれていることに気づき、素直に受け止め、悔い改めることができるなら、大きな奇跡が起こるのです。

ヨハネ6章36～40節

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、私は決して捨てません。わたしが天から下って来たのは、自分の心を行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。(6:37-38)

この御言葉の箇所からイエス様は、「起きて床を取り上げて歩きなさい。いままでの生き方を変えなさい」と言ったのです。でも、彼の生き方は、イエス様を見ても、信じようとしませんでした。

私たちは、いつも神様に何を求めているのでしょうか。病を治すことでしょうか。仕事を成功させることでしょうか。お金を得て豊かになることでしょうか。私たちの目線と神様の目線の違いを考えなければならないのです。

マタイ16章5～12節

神様の目線と私たちが見ている目線は、ずれがあるのです。弟子たちは、イエス様をしっかり見極めることがなかなかできなかったのです。パリサイ人は、愛ではなく、ルールに目を向けていたのです。病気の人は、自分を見ることができなくなって人のせいにしてしまいました。これらは、ごんぎつねのストー

リーとよく似ています。私たちが見るべきところはどこでしょうか。

神様はみことばで私たちの根底を変えていく

・Relation or Religion

教会は宗教をするところではなく、自分がずれているのであれば、罪に気付いて、悔い改めようとする場所です。自分のために命をかけて十字架にかかってくださった方がいます。だから、神様の前に出て、自分の間違っている部分に気付いて、素直にごめんなさいをするところです。

・神のみもとに or 奉仕(労働)

日々の仕事と神様との生活は別々でしょうか。それとも、神様のみもとに仕えに行っているのでしょうか。十字架こそが私たちの人生です。

・交わり or 備え(心配、蓄え、執着)

私たちは、執着して不安だから蓄えたいのです。しかし、神様と交わりが持たれているならその不安はあるのでしょうか。

・神自身を求める→聖霊の満たし

神自身を求めると、聖霊様に満たされるのです。

Relationを求め、神様のみもとに近づき日々を仕え、また、神様と交わることを選び取ることが出来れば、私たちは聖霊様に満たされるのです。聖霊様に満たされた人は、そこに奇跡を体験するのです。

チャック・スミス

映画「十字架ととびなしナイフ」で描かれたチャックスミスは、ギャングの紛争や麻薬中毒が蔓延する厳しい環境化にある中で、たくさんの人を救いに導いた牧師です。

チャックスミスは、問題の中にある多くの若い世代と交わりました。しかし、神様に会ったけど多くの人がそこから去っていくのを見て、また同じ罪に戻ってしまうものではないかということが一番辛く苦しかったと言っています。神様から去っていった多くの人は、聖霊様に会っていなかったのです。

生き方を変える方法は、まず神様を求めていこうとする心です。病の癒しを通して、魂を癒す神様に目を向けなければならないのです。魂を癒す神様は、私たちの人生を変えます。神様が願っていることは、あなたが魂の上で幸いを得ていることなのです。そうすると、すべての面で幸いを得、健やかであると言っています。

私たちは、魂に幸いを得なければならないのです。誰かを恨み憎んでいる。誰かのことを傷つけようとしている。誰かに対して怒っている。自分に対して、また人に対して欺きがある。欲にまみれて自分たちが見ているものはずれている。もし、そのようなことがあるのなら、私たちの心は蝕まれると同時に体も蝕まれていくのです。

私たちは、そのずれた罪に気づき、聖霊様と共に人生をつくり変え、そして、十字架の奇跡を体験していきましょう。

まとめ

自分はどんな状況になっているのでしょうか。自分が被害者になった時、何を考えますか。神様に何を求めていますか。パンですか。私たちの目の前にある問題を解決してくださることですか。

教会が私たちの人生を変えるわけではありません。教会は、二人三人わたしの名において集まる場所であり、そこにイエス様がいることに価値があります。しかし、もしその集まった人が Religion【奉仕(労働)】で集まっているのなら全く価値がありません。神様との関係を求め、自分のずれをそこで感じ、もし私たちがそこで求めるなら、私たちの人生は変えられていくのです。

(要約者: 西寄 達也)

(2025年11月9日)